研究ノート

昭和の生活文化に関する聞き取り体験の意義について

光野裕美子・鶴　静子・高尾兼利

（佐賀短期大学　生活福祉学科）

（平成20年２月29日受理）

The Significance of Listening on the Culuture of Life in Showa

Yumiko MITSUNO, Shizuko TSURU, Kanetoshi TAKAO

(*Department of Life and Welfare,Saga Junior College*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

This study examined the significance of listening to the culture of life in Showa. Care working students listened to the culture of life in Showa that the aged learning at "Elder C ollege" responded to their questions. This experience provided students with improvement of their ability to communicate with the aged in welfare institutions. Care working students were able to communicate with the aged smoothly and more interested in Syowa Culture the aged remember frequently.

Key words : the culuture of life in Showa　昭和の生活文化
ability to communicate　コミュニケーション能力
the aged　高齢者

1．問　題

介護福祉実習Ⅰで達成すべき内容の一つに「よりよい対人関係の築き方を学ぶ」があげられている。「高齢者との会話が途切れる」「何を話題にしたら良いのか分からない」と、高齢者とのコミュニケーションの困難を訴える学生が近年増加した。また、現場の実習指導者から、「コミュニケーションの技術や利用者の方との適切な接し方ができていない」等の指摘があった。こうしたことから、介護福祉士を養成する機関である本学においては、コミュニケーション能力の向上が緊急の課題の一つと考えられた。

2．目　的

介護福祉士の資格取得を目指す学生の、高齢者とのコミュニケーション能力の向上に資することを目途に、その教授法について検討することを本研究の目的とする。教授法の一つとして、昭和の生活文化に関する高齢者からの聞き取り体験を実施した。今回はその意義について明らかにしたい。

3．方　法

昭和の生活文化について、高齢者を対象に聞き取りを実施する。さらに、学生個人の調査をこれに加える。その後、聞き取りの効果を質問紙により調査する。調査は介護福祉実習の前と後に実施した。

1）高齢者を対象にした聞き取りの実施について

聞き取りの方法は以下の通りである。

① 学生に対して、今回の試みの目的が「高齢者とのコミュニケーション能力の向上」にあることを説明する。

② 学生の興味を喚起するために、昭和の生活文化を視聴覚教材により紹介する。

③ 昭和の生活文化について、高齢者に対して聞き取りすることを説明する。

④ 38名の生活福祉学科1年生を班に分ける。1班は2名から3名とした。

⑤ 聞き取り実施前に、聞き取りのロールプレイを行う。昨年度聞き取りを経験した2年生を高齢者役に、1年生を聞き取り役にする。

⑥ 昭和の生活文化を細分化した分野を紹介する。各班が興味を抱いた分野を選択する。細分化した分野は、次の通りである。「冠婚葬祭」「学校関係」「家庭」「仕事」「地域」「娯楽」「事件・イベント」。

⑦ 聞き取りの対象を選択し聞き取りを事前に依頼する。1回目は、エルダーカレッジ4年生31名（55歳から79歳までの男性15名、女性16名）、2回目は生きがい作り教室参加者23名（男性2名、女性21名）である。

⑧ 本学健康福祉生涯学習センター内で各回約40分間聞き取りを実施する。1名が質問し、1名が記録を担当する。高齢者は各班2から3名で答えることにした。

⑨ 記録メモを手掛かりに、各班が各分野について文章化する。この文章を担当教員に提出し、修正等を受けて、聞き取りの完成とした。

2）学生の各個人による昭和の生活文化についての調査

学生各人の個人的興味に応じて、昭和の生活文化に関した事項を選択し、文献やインターネット等で調査して、文章化し、これを担当教員に提出して完成とした。

3）質問紙調査の実施

介護福祉実習Ⅰの前後に、質問紙調査を実施した。

① 介護福祉実習前の質問について

介護福祉実習Ⅰ前の質問内容は以下の通りである。

「昭和の生活文化研究」聞き取り体験についての調査

平成19年度版

1．高齢者の印象について

1）家族以外の高齢者の方々と、これまで（短期大学入学前まで）交流した経験はありますか。どちらかを○で囲んでください。「ある」と答えた方は、いつごろ、どんな場面で、どのくらいの時間、どういった交流でしたか。

ない

ある

時期＿＿＿＿＿＿　場面＿＿＿＿＿＿

時間＿＿＿分　内容＿＿＿＿＿＿

2）聞き取りをする前後で高齢者の方についての印象は変わりましたか。次の3通りの中から選択して答えてください。＊に印象に関する概念を表示しておきました。参考にしてください。

かなり変わった

少し変わった

ほとんど変わらなかった

3）変わった、少し変わったと答えた人はどのように変わったか答えてください

体験前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

体験後＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

変わらなかったと答えた人は、これまでの高齢者についてのあなたの印象を答えてください

2．昭和の生活文化についての印象

1）昭和についての興味関心の度合いが変わりましたか。次の3通りの中から選択して答えてください。＊興味関心についての概念をあげています。参考にしてください。

かなり変わった
少し変わった
ほとんど変わらなかった

2）変わった、少し変わったと答えた人はどのように変わったか答えてください

体験前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

体験後＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

変わらなかったと答えた人は、昭和について、これまでの印象を答えてください

3）聞き取りした内容で、印象に残っていることを答えてください。

3．聞き取り体験の影響について

1）聞き取り体験があなたに何らかの影響を与えたと思いますか。当てはまるところを○で囲みなさい。

かなり影響を与えた
少し影響を与えた
ほとんど影響を与えなかった

2）聞き取り体験があなたにどのような影響を与えたと思いますか。

3）聞き取り体験が「介護福祉実習1段階」に何らかの影響を与えると思いますか。当てはまるところを○で囲みなさい。

かなり影響を与える
少し影響を与える
ほとんど影響を与えい

4）聞き取り体験が「介護福祉実習1段階」にどんな影響を与えると思いますか。自由に答えてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

② 介護福祉実習Ⅰ後の質問項目について

介護福祉実習Ⅰ後の質問内容は以下の通りである。
介護福祉実習終了後1週間目に実施した。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

聞き取り体験が実習に及ぼす影響についての調査

1．介護福祉実習Ⅰの対象となった施設名を右に書いてください。

2．今回の実習に聞き取り体験が何らかの影響を与えたように感じますか。

当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① かなり影響を与えた
② 少し影響を与えた
③ あまり影響を与えなかった
④ まったく影響を与えなかった

影響を与えたと感じた人は、どのような影響を与えたと思いますか。どんなことでもいいですから、書いてください。

3．実習期間中に「昭和の生活文化研究」の聞き取り体験や調べた事などが心の中に浮かびましたか。当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① 心の中に浮かぶことがあった
② まったく浮かばなかった

4．聞き取りしたことや調べたことを高齢者とのコミュニケーションで活用しようと思いましたか。さらに、実際には活用しましたか。

1）活用しようと思いましたか。

当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① 活用しようと思った
② 活用しようと思わなかった

2）実際に活用しましたか。

当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① 実際に活用した　→　3）
② 実際には活用しなかった　→　4）

3）活用した人に質問します。

① 活用した話題はどんなことですか。
② どのような状況で、どのような人に、どのくらいの時間、その話題で交流しましたか。

相手の人＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
状況＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
時間＿＿＿＿分

4）活用しなかった人に質問します。その理由はどんなことですか。

当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① 思い浮かばなかった
② 思い浮かんだが活用の仕方が分からなかった
③ 思い浮かんで、活用の仕方も思いついたが、そのチャンスがなかった

5．今回の「介護福祉実習Ⅰ」で、利用者の方とうまくコミュニケーションできましたか。

当てはまるところの番号を（　　）の中に記入してください。（　　）

① かなりうまくいった
② 少しうまくいった
③ 少しうまくいかなかった
④ かなりうまくいかなかった

4．結果と考察

1）聞き取りの結果について

学生の聞き取りは以下の通りである。ここでは抄録を掲載する。「昭和の生活文化研究報告」に全体を記述した。

聞き取りは、2つの高齢者の集団に対して実施した。一つは、本学のエルダーカレッジ4年生31名である。55歳から79歳までの年齢幅である。その中で65歳から69歳までが14人と最も多かった。男女比は、男性15名、女性16名である。もう一つは、生きがいづくり教室参加者の23名である。参加者自らは年齢を明かされないので、不明である。話の内容その他から、70歳以上と考えられる。男女比は、男性2名、女性21名である。

聞き取りの内容は、それぞれのテーマごとに、ⅰ）聞き取り前に分かったこと、ⅱ）聞き取りで分かったこと、ⅲ）聞き取りの感想、ⅳ）答えてくれた人からなっている。以下「昭和の学校」「昔の遊び」「出遭って結婚まで」を紹介しておく。

① 昭和の学校について

ⅰ）聞き取り前に調べて分かっていたこと

造りは、ほとんどが木造であった。

ⅱ）聞き取りで分かったこと

（校舎の作りとクラス）

校舎は木造、地域により増減はあるが、一学年2クラスで80名ほどであった。男女別学級で、戦後しばらくして共学になった。

（服装・履物）

服はおさがりや、親の着物、帯をほどいて仕立て直して着ていた。「少しでも、綺麗な物をと親心で作ってくれた。」と話された。通学は下駄だった。積雪すると歩きにくいので竹馬で通ったりもした。

（給食）

給食はなく、お弁当持参であったが、持って行けない児童は、昼食抜きで午後の授業を受けた。当時は、家でも芋や大根を食していた。

（授業）

授業は国・理・社・数・図工・体育・音楽などであった。各教科でテストもあった。音楽では、オルガンの弾き方、曲作りなどであった。体育は、男女の時間割りは別々であった。男子は、野球やサッカー（地下足袋を履いていた）、陸上をした。女子はドッチボール、ソフトボール、バレーボール、陸上をしていた。家庭科は、女子のみしていた。それに、「修身」という道徳的教育―親に孝行することや愛国心を養う―を行っていた。

（卒業後）

中学卒業後の男子の高校進学は、学年で2、3人程度であった。女子は、裕福で親の理解が得られる家庭の子どもは、家政学校に進み和裁を習えたが、ほとんど家業（農業）の手伝いをさせられた。長男ではない子のなかには戦時中、予備兵として志願する生徒もいた。

（その他）

授業前後のチャイムは半鐘が鳴っていた。先生は特別な存在であり、体罰もあり、廊下に立つ、バケツを持つ、防空壕に入るなどは普通であった。

修学旅行は行かない子もいた。

バスが来ない地区では、山越えして隣県の駅まで夜中歩いたが、子供の足にはかなりの距離であった。

ⅲ）聞き取りの感想

お話の最後に「当時を振り返ってどうでしたか？」と尋ねると、「夢も希望も持てなかった」と言われた。本来なら、楽しく思い出に残る学生時代であるのに、その言葉は重く感じた。勉強よりも家の手伝いに追われ、学校に行く以外は働いていたそうである。ただ、「助け合いの心、親や人に対する敬いや思いやりの気持ちは皆が持っていて、温かい人情があった」と、笑顔で話され、懐かしそうな表情であった。

確かに厳しい時代であったことに変わりはないが、ものが豊かになりすぎた今の時代にはない心の豊かさを、当時は、誰もが持っていたことが、その言葉からくみ取れた。私たちもその気持ちを忘れないようにしなければと思う。

ⅳ）答えてくれた人

昭和10年生まれの男女2名

② 昔の遊びについて

ⅰ）聞き取り前に調べて分かっていたこと

昔の子供は今の子供達のように、家の中でゲームしたりして遊ぶようなことはなく、ほとんど外で遊んでいた。

ⅱ）聞き取りで分かったこと

昔の子供の頃の遊びといえば、ビー玉遊び・メンコ・陣とり・紙鉄砲・かくれんぼ・木登り・コマまわし・おはじき、などだった。遊ぶために必要な道具は自分で山などから材料を取ってきて、近所のお兄さん、お姉さんに作り方を習って作っていた。だから、今みたいに遊ぶために使うお金は必要ではなかった。

年齢が増すにつれて遊ぶ場所も変わっていった。青少年の遊びといえば今みたいに遊ぶ場所がなかったので、お祭りに行くか、映画を見に行くぐらいしかなかった。

映画館は、今の設備とは違い、イスは硬く、映写機だった。また冷暖房設備が整っていなかったので、夏は扇風機で暑さをしのいでいた。

ⅲ）聞き取りの感想

今回の昭和の文化研究で2人のエルダーカレッジの方の話を聞くことができた。昔の子供たちは遊ぶために使

うお金というものはほとんどなく、自分達で遊びを発見しおもちゃを作った。これは、すごいと思った。

また、エルダーカレッジの方が共通して言われたことは、「とにかく忙しかった！」ということだ。子供の頃から家の手伝いをしていて、遊ぶ暇はほとんどなかったということだった。私たちは遊ぶ時間も遊ぶ場所もたくさんある。昔の子供たちは、なかなか遊ぶことができず苦労をたくさんしていたんだなあと思った。

ⅳ）答えてくれた人

昭和12年生れの女性２名

③　出逢って結婚まで

ⅰ）聞き取り前に分かっていたことは、特にない。

ⅱ）聞き取りで分かったこと

（お見合い結婚の方）

紹介してくれる親戚や仲介者がいた。結婚までの反対はなかったが、両方の親から結婚をせかされた。デートを何回か重ね、プロポーズもなく半年で結婚した。

結婚式は親戚同士が集まって家でお祝いをし、２～３日続いた。そのあとの２次会はなかった。引き出物は、結び鯛を２匹（かまぼこ）、お酒は日本酒だった。嫁入り道具は、着物、帯、座布団、下駄、洋ダンス、鏡台などで、全て花嫁の実家で準備した。

（恋愛結婚の方）

高校時代は、ただの顔見知りだった。一緒の職場で働くようになり、旦那さんからアプローチした、いわゆる社内恋愛だった。グループデートを何回か重ねて、親の反対もなく結婚した。

結婚式はお見合い結婚と同様、親戚同士が集まって、お祝いをした。朝から晩まで、花嫁衣装を着ていなければならなかったが、もう二度と着たくない程重たかった。

引き出物は、お見合い結婚と同じ内容だった。

ⅲ）聞き取りの感想

昔は恋愛結婚よりもお見合い結婚が、やはり多かった。今の結婚式は式場で挙げることが多いが、昔は親戚同士、そして近所の方々も協力して盛大な結婚式を挙げていた。今以上に近所付き合いが頻繁にあっていたと感じた。

今の嫁入り道具は電化製品などが多いが、昔は着物や帯、鏡台や下駄などで、今とは本当に違うと感じた。結婚する年齢も、現代の女性よりも早い事がわかった。たくさんの恋愛話を聞けて、とても面白く自分たちもこんな素敵な恋愛ができたらいいなと思った。

自分たちが今度行く１段階の実習はコミュニケーション中心なので、こういう話ができたらいいなと思った。

ⅳ）答えてくれた人

昭和20年生れ（女性）・昭和17年生れ（女性）・昭和30年生れ（女性）・大正10年生れ（女性）

２）介護福祉実習前の聞き取り体験についての調査の結果及び考察

調査対象者は、生活福祉学科１年次生36名であり、回答者は36名であった。調査項目に沿って結果及び考察について記述する。

２－１）高齢者の印象について

(1)　家族以外の高齢者との交流体験の有無について

これについては下記の表１－１に示した通りである。

72％の学生が高齢者との交流体験があると答えている。家族以外の高齢者との関わりを持ち、高齢者に関心がある。このことも影響してか、何か高齢者に関わる専門職に就きたいと思い、そうした学生が生活福祉学科を志望して入学してきたと考えられる。

表１－１　家族以外の高齢者との交流体験の有無について

交流した経験	人数	%
ある	26	72
ない	10	28

(2)　高齢者との交流体験の時期と場面について

これについては下記の表１－２に示した通りである。中学生の頃、学校が用意したボランテイア活動や地域行

表１－２　高齢者との交流体験の時期と場面について

時　　期	人数	%	場　　面
小学生の頃	5	20	・電車の中や地域行事の際に高齢者とのふれ合いが有った ・親類が集まる慶弔行事の折に高齢者の方とお話をした ・父親の職場について行った時に高齢者の方とお話をした
中学生の頃	6	26	・病院や施設でのボランテイア活動中に触れ合いがあった ・地域での給食サービスの手伝いをした時にお話をした
高校生の頃	13	57	・地域の高齢者と会った時にお話をした ・老人福祉施設実習の時 ・ボランテイア活動をした時
社会人として働いていた頃	2	9	・社会人の時の勤務先での接客対応をした時

事などで体験した学生と、高校生の頃ホームヘルパー実習などで老人福祉施設実習を体験している学生が、高齢者との交流があったと答えている。やはり、大学入学前の家族外の高齢者との交流は、学校教育で準備されたものであり、その影響は小さくないと考えられる。

(3) 聞き取り体験による高齢者の印象の変化について

今回、エルダーカレッジ生の皆さんに対して本学生活福祉学科１年生36名が昭和の生活文化について聞き取りを実施した。体験の前後で高齢者についての印象が変化したかどうか。このことについての結果を表１－３に示した。表１－３で分かるように、ほとんど変わらなかったと答えた学生が56％と半数を超える。それまでに高齢者との関わりを持った学生が、本学科へ入学をしていることが関係していると思われる。一方印象が変化した者も４割いる。これも見逃してはならない。どういった印象を抱いていたか、どういった印象に変化したか。このことが肝心なことと思われる。

表１－３　聞き取り体験による高齢者の印象の変化について

聞き取り前後の高齢者に対する印象	人数	%
かなり変った	3	8
少し変った	13	36
ほとんど変らなかった	20	56

(4) 体験前と体験後の印象の違いについて

聞き取り体験前の高齢者に対する印象と体験後の印象を対比したものが表１－４である。生活体験の豊富な高齢者との聞き取りの交流によって学生達は、今まで知りえなかった生活文化について知り、それまで以上に、昭和の時代に興味を覚えたようである。また、これを語ってくれた高齢者に肯定的な印象を持ったようである。

表１－４　体験前と体験後の印象の違いについて

体　験　前	体　験　後
・自分が生きてきた時代だけしか知らなかった。	・高齢者の方の話を聞いて時代背景がわかり現代と照らし合わせることができた。
・体験前は挨拶をしなかった。	・体験後は挨拶をするようになった。
・エルダーカレッジの方は、静かなおっとりしたイメージの人。	・いろいろな事を話して下さって、物知りで優しいと思った。
・エルダーカレッジの方は元気なお年寄りばかりだと思っていた。	・話せば話すほど、話して下さって、人間味があり自分にとって為になった。
・昔は毎日平凡に暮らしていた。	・昭和の変動の時代を苦労してここまで、生きてこられたのだと思った。
・特に気にしたことが無かった。	・少し昔のことに興味がわいてきた。
・打ち解けにくいと思っていた。	・話してみたら打ち解けやすかった、丁寧に解りやすく、話して下さったのですごく楽しく感じた。

一方変わらなかったと答えた学生は、これまでの高齢者についての印象について次のように答えている。以下箇条書きにして示す。

・高齢者の方が生きて来られた時代は、今の時代とは違って、厳しい生活環境の中で生き抜いて来られた人生の大先輩という印象である。
・戦争や物資難の時代を乗り越えてこられた、生活経験豊富な人という感じで、存在感がある。
・お話をして打ち解けやすい心の広い方、話好きで人が良いと思える。
・物知りで優しい感じ、何でも応えて下さるという感じ。
・子どもの頃の話や、育ってきた生活環境など昔を懐かしみながら時には、今の世代の人に伝えたい事などを話された。
・今の私たちの生活では想像もできない生活であったと思われた。
・エルダーカレッジの方との聞き取り調査は、私にとって日常生活で多くの方々と接しているため、特に変わった事はなかった。

聞き取りにより印象は変化していないまでも、高齢者に対してして肯定的な印象であり、これは印象が変化した学生と共通している。このことを指摘しておきたい。

また、語られた高齢者の豊かな生活体験は、昭和という激動の時代にロマンすら感じさせたようである。

２－２）昭和の生活文化の印象について

学生が聞き取りにより知ることができた昭和の生活文化について、どのような印象を持ったか。その印象が変わったのか。また、聞き取りした中で印象に残っている内容はどんなものか。これらについて調べた結果が次の通りである。さらに、各々の結果について考察を加えた。

(1) 昭和についての関心の度合いの変化について

これについては下記の表２－１の通りである。

「かなり変わった」「少し変わった」を合わせると、28名となる。これは全体36名の82.4％となり、聞き取り体験が昭和の印象を変えたと思われる。

表２－１　昭和についての関心の度合いの変化について

かなり変わった	少し変わった	ほとんど変わらなかった	回答なし	総　数
6	22	6	2	36

(2) 昭和の印象の変化について

回答の自由記述を４項に分類できた。括弧内は人数を示している。昭和についての興味関心の変化(6)、現在と昭和の比較(6)、昭和の見直し(5)、現在と昭和との関連の自覚(1)の４項である。

印象内容の自由記述からも、聞き取り体験が昭和についての興味関心を高めていることがうかがえた。単純に「そこまで興味が無かった」から「興味津々」へ変わったもの、「興味がなかった」から「今の暮らしと昔の暮らしの違いに興味を持った」と多少具体的に述べもの、さらに「元々興味があった」から「さらに興味が湧いた」と関心の更なる高まりを記述したものまであった。「どうでもいいと思っていた」学生が、昭和について「いろいろ知ることができたし、楽しかった」と感じたこと、このことは注目すべきことのように思われる。すなわち知ることが楽しい、この体験が素地になって、次の興味の高まりに結びつくと考えるからである。さらにこの素地は、本を読んだり、視聴覚教材に触れることによっては生まれにくい。今回のように、直に昭和の人に触れてこそ生まれるもののように思われる。実際に体験した人が直に語る。その威力が反映されたのではなかろうか。

また、学生が生きている現在を基軸に、昭和と比較し、見直し、さらに現在と昭和のつながりを自覚したことがうかがえた。たとえば、昭和は「古いけれども、今にない良さもたくさんある」、昭和の印象は「不便な生活」から「知恵や考え方がすごいと思った」、昭和は「今とは違うが、自分たちに深く関係している」等と記述されていた。

(3) 聞き取りをした内容で印象に残っていることについて

印象に残っている内容は５類に分けることが出来る。１番目は、印象に残った話そのものの記述である。この類が最も多い。恋愛・結婚、学校、食べ物、家庭、遊び、戦争のことが記述されている。その中でも、恋愛・結婚に関することが多く見られる。学生自らの関心に符合した結果の表れであろうか。たとえば、「同じ花嫁衣裳を一日に多くの人が使っていたこと」「学校の鐘打ちをする人がいたこと」「自分たちで遊びの道具を作って遊んでいたこと」などが記述されている。また、これらについて、「貧乏」「不便」「不足」「不自由」なものとして学生たちが理解していることがわかった。２番目に、話そのものに対する自らの感情や欲求を付け加えて記述したものが見られる。たとえば、「鬘がとっても重かったそうで、かぶってみたいと思った」「昔はごちそうがバナナだったことにびっくりしました」などと記述されている。昭和の生活文化について、「面白い」「大変」「びっくり」「すごい」「よかった」との評価を与えている。３番目に、具体的話を抽象化し、現在と比較している記述が見られる。たとえば、「普通の暮らしの中で今と（昔が）違うところが面白いと感じた」「（現在と比べて）結婚の相手を選ぶ場合の不自由さ（が印象に残っている）」などがあげられる。括弧内は、執筆者の補足である。４番目に、話してくれた高齢者による現在に対する批判が、印象に残っている学生もいる。これは２名と少数である。「今の子ども達は礼儀を知らない（と批判されたこと）」との記述がある。５番目に聞き取り体験そのものや対象についての記述が見られた。「聞き取りの対象が昔教師だったこと」が印象に残り、「昔の恋愛などを聞けてよかった」と感じているようである。

(4) 聞き取り体験の影響について

聞き取り体験がどのような影響を与えたのか。その程度、内容、さらに同一事項を、介護福祉実習Ｉに絞って質問した。その回答結果を記述し、考察を加えたい。

① 聞き取り体験の影響の程度について

結果は次の表２－２の通りである。

表２－２　聞き取り体験の影響の程度について

かなり影響を与える	少し影響を与える	ほとんど影響を与えない	回答なし	総　数
4	23	5	4	36

「かなり影響を与える」「少し影響を与える」合わせると、27名となる。総数36名の75％に当たる。聞き取り体験が学生に何らかの影響を与えると予想している学生が多いと考えられる。

② 聞き取り体験が与えた影響について

聞き取り体験の影響は、次の６類に分けられる。１番目に、聞き取りが学生に「教訓」を残したことが印象深い。「ぜいたくはダメだと思った」「ご飯粒を残さなくなった」「親の手伝いをしなければと思った」「食べ物を大切にしなければと思った」との記述が見られた。２番目に、単純に昭和に対する認識の変化を述べたものがある。「昭和のイメージが変わった」がその代表である。３番目には、こうした単純な影響よりも、体験が昭和について知ろうとする意欲を引き出したことがうかがえる記述が目立った。「昔のことを知ろうと思うようになった」「昭和に興味を持つようになった」「昭和を生きた人たちに興味が出てきた」との記述が見られた。昭和自身への興味に限らず、昭和に生きた人への興味に及んでいることが注目に値する。また「昭和について知らないことが結構あることが分かった」と「知らないこと」への気づ

きが述べられている。興味をもつ前段階の自覚であろうか。さらに、「聞く前はあまり関心がなかった」とも記述されている。関心が生まれて初めて関心がなかったことに気づくのであり、この気づきも知ろうとする意欲に繋がるものと思われる。4番目に、高齢者への印象が肯定的なものに変わったことがうかがえた。そうした記述が少なくなかった。「高齢者が優しく答えてくれた」「先駆者を尊敬できた」「若い世代に対する高齢者の理解と優しさ（があることが分かった）」「高齢者の（生きた）昔が楽しかったことがわかった」の記述がこれに当たる。5番目に、コミュニケーションのあり方に影響を与えた場合があげられる。「話し方を学ぶことが出来た」「他人に質問することが難しいことがわかった」「年齢の離れた人との会話が難しいのがわかった」などがこれに当たる。さらに、話の素材とコミュニケーションのあり方を関連付けた学生もいた。「昔のことを知ることができて、高齢者のコミュニケーションに役立つと思った」との記述も見えた。6番目に、昭和と自己の生きる時代を比較した「自己の相対化」が見られたことを指摘しておきたい。「今の時代を生きる私たちがどれだけ幸せなものかを教えてくれた」「（昭和では）小さい時から仕事をしていた。現在の子どもは（そんなことしないで済む）、幸せに過ごすことが出来ている」との記述がこれに当たる。

③　聞き取り体験が介護福祉実習Ⅰに与えた影響の程度について

表２－３　聞き取り体験が介護福祉実習Ⅰに与える影響の程度について

かなり影響を与える	少し影響を与える	ほとんど影響を与えない	回答なし	総　数
10	17	3	6	36

結果は次の表２－３の通りである。

かなり影響を与える、少し影響を与える、との回答者数を合わせると、27名になる。全体の75％に当たる。聞き取りが実習に影響を与えるものと考えていることが分かる。実習に限らない、広くその影響を問うた先の質問では、表３－２にある通り、「かなり影響を与える」が４名であるのに対して、今回の実習に対する影響では、これが10名になっている。２倍以上の増加である。ただし、「少し影響を与える」の回答数と合わせると、両者共に22名となり、同数である。実習に絞ってその影響を考えると、より具体的に思い浮かべることができる。その想起の具体性の違いが、「かなり」と答えた学生の割合の増加に関係しているように思われる。

④　聞き取り体験が介護福祉実習Ⅰに与える影響について

コミュニケーション時の表現のための素材として、その影響を意識していることがうかがえる回答と、高齢者についての理解を広げる、深めることに影響を与えると意識している回答の２類に大別できる。表現のための素材としての影響の場合は、高齢者（施設利用者）が関心を向ける素材を獲得したことをしっかり意識している場合と素材意識は弱いながらも高齢者とのコミュニケーションへの影響を記述している場合に分けることができる。前者の例として、「聞き取った内容で利用者と話すことができる」「コミュニケーションで行き詰ったときは、昭和の生活についておききする事ができる」「実習に行ったときに少し話題があるので良かった」があげられる。素材としての利用価値を意識した学生とそうでない学生はどのように違っているのだろうか。素材意識の強い学生の中には、よりよいコミュニケーションを求めて、昭和についての知識を増やす動きが期待される。

一方後者の場合は、「コミュニケーションが以前より数段とりやすくなると思う」「どういう風に接すればよいか分かった」「話を円滑に進めることができる」があげられる。このように素材意識が弱い場合は、その影響について多様な記述が見られた。具体的には、コミュニケーションが「深まる」「円滑になる」「うまく行く」「弾む」「続く」「きっかけになる」との記述が見られた。

３）介護福祉実習Ⅰ後調査の結果と考察

聞き取り体験が学生の介護実習にどのような影響を与えたか。実習前の聞き取り体験や調べた内容が、実習中心の中に浮かんだか。聞き取りしたことを実習中に活用しようと思ったか。実際に活用できたか。どのようなことを活用したか。活用しなかった理由は何か。その結果、コミュニケーションは、うまくいったのか。これらについて質問した結果が次の通りである。また、個々について考察を加えた。

(1)　介護福祉実習Ⅰの対象となった施設

介護福祉実習Ⅰの対象になった施設は、老人福祉施設が23施設、障害者施設・救護施設が13施設である。

(2)　介護福祉実習Ⅰに対する聞き取り体験の影響について

介護福祉実習Ⅰに対する聞き取り体験の影響は下記の表３－１の通りである。

「かなり影響を与えた」と「少し影響を与えた」の合計を、影響を与えたとし、「あまり影響を与えなかった」と全く影響を与えなかった」の合計を、影響を与えなかっ

表３－１　介護福祉実習Ｉに対する聞き取り体験の影響について

	老人福祉施設(23)	障害者・救護施設(13)	計(36)
かなり影響を与えた	8(22.2%)	1 (2.8%)	9(25.0%)
少し影響を与えた	10(27.8%)	0 (0%)	10(27.8%)
あまり影響を与えなかった	5(13.9%)	6(16.7%)	11(30.6%)
全く影響を与えなかった	0 (0%)	6(16.7%)	6(16.7%)

%は全体を分母とした数字である、以下の表は同様である

たとすると、影響を与えた割合が全体の52.8%となり、半数を超え、聞き取り体験が介護実習のあり方に影響を与えたと考えられる。これを、老人福祉施設での実習に限定すると、78.3%となり、８割近くのの学生が、何らかの影響を受けたと感じていることがわかる。一方、障害者・救護施設では、１名以外は影響を与えていないと感じている。この１名は社会人入学の学生であるため、生活経験や本人の特性から、影響を感得したものと思われる。老人福祉施設での実習に、影響を感じている学生が多いのは、言うまでもなく、聞き取り体験の対象者が高齢者であったためであろう。

次に、影響を与えたと感じた人は、どのような影響を与えられたと考えているのであろうか。この回答の結果を、「話題」「接し方や質問の仕方」「今後についての意義」の３類に分類した。詳細については、以下のとおりである。各分類について、以下に箇条書きにした。

話題については、以下の通りである。

・知らないことばかりで大きな影響があった。
・昔の話題だと利用者が興味を持ってくれた。
・仕事についての話題で盛り上がった。
・会話の種になり、それから発展した。
・コミュニケーションの際に昔の話ができた。
・話題が見つからないときに、昭和のことについて話をすると盛り上がった。

接し方や質問の仕方については、下記の通りである。

・質問の仕方や話し方のヒントになった。
・高齢者の方との接し方がわかった。
・何の偏見も持たずに利用者と接することができた。

今後についての意義については、下記の通りである。

・とても勉強になった。
・もっと、昔のことを知る必要がある。
・正規の教科では学べないことを学ぶことができた。

以上をまとめると、以下のようになる。実習前の高齢者に対する聞き取り体験が、実習中の利用者との話題を増やし、接し方や質問の仕方のヒントを与え、そのため学生自身も利用者と楽しくコミュニケーションできていることがわかる。また、実習に直接繋がらないまでも、今回の体験が有意義であると感じている。

(3)　聞き取り体験や調べたことが実習中に心の中に浮かんだ度合いについて

聞き取り体験や調べたことが実習中に心の中に浮かんだ度合いは、表３－２の通りである。

表３－２　聞き取り体験や調べたことが実習中に心の中に浮かんだ度合いについて

	老人福祉施設(23)	障害者・救護施設(13)	計(36)
浮かぶことがあった	14(38.9%)	3(12.0%)	17(47.2%)
まったく浮かばなかった	9(25.0%)	10(27.8%)	19(52.8%)

聞き取り体験が実習中に心に浮かんだのは、老人福祉施設の実習に限定すると、60.9%である。また、障害者・救護施設の実習に限定すると、23.1%が心に浮かんだと答えている。聞き取り体験の対象者が高齢者だったため、老人福祉施設での実習中にその体験が心に浮かぶ学生がより多かったのであろう。一方、障害者・救護施設での実習においても４分の１弱の学生が心に浮かんだと答えている。これは、障害者・救護施設でも高齢の方が生活されている施設の現状と障害者や高齢者にかかわらず、コミュニケーションを図るという共通の課題に直面し、聞き取り体験が心に浮かんだのではないかと考えられる。

(4)　聞き取りした事や調べたことを活用しようとした度合いについて

聞き取りしたことや調べたことを活用しようとした度合いは表３－４の通りである。

表３－４　聞き取りした事や調べたことを活用しようとした度合いについて

	老人福祉施設(23)	障害者・救護施設(13)	計(36)
活用しようと思った	19(52.8%)	6(16.7%)	25(69.4%)
活用しようと思わなかった	4(11.1%)	7(19.4%)	11(30.6%)

活用しようと思った学生が全体の69.4%である。老人福祉施設での実習に限定すると、82.6%となり、８割以上の学生が、実習で活用しようと思っている。活用しようと思わなかった学生は、老人福祉施設では、17.4%で

あり、障害・救護施設では53.8%であった。この違いは、聞き取り体験の対象者が高齢者であったことによると思われる。すなわち、コミュニケーション対象者の類似度の違いが、この際を生んだものと思われる。

(5) 聞き取りしたことや調べたことを実際に活用した度合いについて

聞き取りしたことや調べたことを実際に活用した度合いは表３－５の通りである。

表３－５　聞き取りしたことや調べたことを実際に活用した度合いについて

	老人福祉施設(23)	障害者・救護施設(13)	計(36)
実際に活用した	13(36.1%)	1(2.8%)	14(38.9%)
実際には活用しなかった	10(27.8%)	12(33.3%)	22(61.1%)

実習中に、聞き取り体験を活用しようと思ったと答えた学生が、老人福祉施設での実習に限定すると82.6%であったものが、実際に活用したとなると、56.5%と減少している。老人福祉施設を利用する高齢者には、難聴の人や言語に障害を持つ人が少なくない。こうした機能的な問題がコミュニケーションに影響を与えたのではないか。その影響が実際の活用の減少に関係していると思われる。一方、学生側は初めての実習であることの戸惑いや実習期間が１週間と短期間であるため、打ち解けないまま実習が終了してしまうこと、利用者の方言を理解できない、これらのことが重なって、実際に活用した人数を減少させているのではないだろうか。

(6) 活用した話題や対象者、状況、時間について

活用した話題や対象者、状況、時間は表３－６の通りである。

これを見ると、話題が恋愛や結婚に集中していることがわかる。

聞き取り体験のテーマについては、グループで聞き取る際には、テーマが集中しないように配慮した。詳細は表３－７の通りである。何も「恋愛」「結婚」に集中してはいないのが分かる。個人での聞き取りに際しては自由としたため、学生自身の興味と関心の高い結婚や恋愛の内容に集中した。学生の関心に応じて、その素材が高齢者とのコミュニケーションの際に活用されやすいことを考慮すべきことと思われる。学生の興味に合わせたテーマを聞き取りの時点で与えるべきかもしれない。

表３－６　活用した話題や対象者、状況、時間について

活用した話題	対象者	状況	時間
昔の結婚式			10分
結婚について	女性	七夕祭りの話題で	10分
結婚、遊び、食べ物	女性	隣に座って	30分
恋愛、見合い結婚	女性	食堂	15分
結婚、恋愛、知り合った場所	女性３人		１時間
幼少期の遊び	女性		１時間
折り紙		折り紙をしながら	２時間
昔の食べ物や仕事			15～30分
昔の仕事			15分
家族、利用者本人のこと	女性	隣に座って	20分
学校や当時の事件について	女性		30分
昔の街、出身地や生活について	女性		１時間10分
戦争	男性		10分
昔日の野球（障害者施設）		野球中継を見て	１時間

表３－７　聞き取り・調査時のテーマ

（グループの場合）

遊び	3
学校・勉強	3
食	3
ファッション・ヘアースタイル	3
結婚	3
住	1
合　　計	16

（個人の場合）

遊び	8
結婚・恋愛	7
食	5
学校	4
事件	3
音楽・映画	3
戦争	1
農業	1
葬式	1
ファッション	1
お金	1
公害	1
合　　計	36

(7) 活用しなかった理由について

活用しなかった理由は表３－８の通りである。

聞き取り体験が思い浮かばなかったのが、老人福祉施設で限定すると、23名中５名の21.7%だが、障害者・救護施設で限定すると、13名中９名の69.2%であった。聞

表３－８　活用しなかった理由

	老人福祉施設活用しなかった＝11	障害者・救護施設活用しなかった＝11	合計活用しなかった＝22
思い浮かばなかった	5	9	14
思い浮かんだが、活用の仕方がわからなかった	5	2	7
活用の仕方も思いついたがチャンスがなかった	1	0	1

き取り体験の対象者が、高齢者であったことから、障害者・救護施設での実習中には、聞き取り体験のことが思い浮かばなかったのではないかと考えられる。また、聞き取り体験が思い浮かんだが、活用の仕方がわからなかったという学生が全体で19.4%あった。聞き取りで理解したことを活用する方法についての学習も必要と思われる。今後の課題である。

(8)　介護福祉実習Ｉでの利用者とのコミュニケーションの度合いについて

介護福祉実習Ｉでの利用者とのコミュニケーションの度合いは表３－９の通りである。

表３－９　介護福祉実習Ｉでの利用者とのコミュニケーションの度合い

	老人福祉施設(23)	障害者・救護施設(13)	計(36)
かなりうまくいった	2(5.6%)	4(11.1%)	6(16.7%)
少しうまくいった	17(47.2%)	8(22.2%)	5(69.4%)
少しうまくいかなかった	4(11.1%)	1(2.8%)	5(69.4%)
かなりうまくいかなかった	0(0%)	0(0%)	0(0%)

「かなりうまくいった」と「すこしうまくいった」をうまくいったとし、「すこしうまくいかなかった」と「かなりうまくいかなかった」をうまくいかなかったとすると、うまくいったが86.1%となる。これを老人福祉施設で限定すると、82.6%となり、障害者・救護施設で特定すると、92.3%となる。

今回の調査では、聞き取り体験や調べた事を実際に活用したのが、全体の60%余りで、コミュニケーションがうまくいったのが全体の86%余りとなっている。これは、どういうことだろうか。86から60%を引いた割合、すなわち26%の学生は、聞き取りで理解したことを活用しなくてもうまくいったことになる。本当に活用しなかったのだろうか。活用したことを自覚していないのではないだろうか。聞き取り体験や調べたことを無意識に活用した結果、実習でのコミュニケーションがうまくいったのではないか。このようにここでは考えておくことにしたい。また、老人福祉施設や障害者・救護施設の実習にかかわらず聞き取り体験が心に浮かんだと答えた学生がいた。このことは、高齢者のみならず、実習前にコミュニケーションの体験を積むことは、大いに実習のコミュニケーションに役に立つことを示していると思われる。ところで、本学に入学した学生には、入学前に高齢者との交流を体験した人が多い。すなわち、入学前にある程度のコミュニケーション能力を持っているものと考えられる。このような学生に対して今回の聞き取り体験を実施した。これによって、さらなるコミュニケーション能力の向上が見られたのではないだろうか。

５．まとめ

介護福祉実習の指導の現場で学生のコミュニケーション能力の低下が感受された。これを契機に、その能力を向上させるための教授法が種々試みられている。その中の一つが今回の試みである。すなわち、昭和の生活文化に関して高齢者に対して聞き取りを体験させる試みである。

その意義については、以下のことが考察された。聞き取りで獲得した昭和の生活文化についての知識がコミュニケーションの媒体素材となり、施設利用者とのコミュニケーションをスムーズにし、学生の自信に繋がったこと、高齢者に対する印象が肯定的になり、高齢者に対する親和性が高まり、コミュニケーション時の不安を低減させたこと、さらに、介護対象者が生きた昭和の時代に興味関心を持ち、高めたこと、昭和の時代を見直したり、自己との関連を考えたりしたこと、これらのことが聞き取り体験の意義と思われた。